イナズマイレブン　風と君と

明華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イナズマイレブン　風と君と

【Ｎコード】
Ｎ７４５２Ｘ

【作者名】
明華

【あらすじ】
稲妻町に帰ってきた一人の少年。
少年は何を思う？

注意　必ずお読みください（前書き）

この注意書きは、変更があるかもしれません……。

注意　必ずお読みください

これは、この物語の注意です。
必ずお読みください。

・作者は腐女子です。
・作者にはサッカー知識はほとんどないです。
・主人公は男の娘です。
　理由↓最初は女子の設定だったんですが、いろいろ設定めんどくさかったので、性格そのまま、性別を
　　男子にしたからです。
・キャラ崩壊します。
・投稿は亀より遅いです。
・意味不明です。
・表現力ないです。
・シリアス、ギャグありだと思います。
・残酷描写あります。
・アニメにそっていきます。
・たまにボカロ曲入ると思います。↑しかも、微妙に歌詞変えます。
・文才ほしいです。

以上の言葉を知らない、無理な人はお戻りください。
ＯＫだというアフロディー様はお進みください。

登場人物～オリキャラ～

名前：風峰（かぜみね）　美希（みき）
性別：男一（の娘）
身長：佐久間ぐらい
年齢：１３歳
一人称：俺
性格：意地っ張り。
　毒舌、だけど根は優しい。
　強がってるけど、精神面弱い。ちょっと崩れたら、一気に崩れる。
　てか、女子に近い。
容姿：黄緑色の髪の毛で長さは肩甲骨のあたりまで。
　おろしていて、左側の一部をみつあみにしてる。
　目は髪の毛と同じ色で、黒ぶち眼鏡をかけている。
　いつも左手にリストバンドをしている。

名前：　　風希（ふうき）
　名前以外は現在謎。

登場人物～オリキャラ～（後書き）

その他増えます。
登場次第、設定載せます。

Ｎｏ．１　忘れていたもの（前書き）

※サブタイトルのセンスもないようです。

えっと、前回、登場人物のところで、更新止まってたんですけど、なんでここでとまってるんだよ！！とか思った人、挙手。

全員にすみませんでした！！

※「」の上に書いてる名前は、その話の主人公の人が呼んでる（思っている）呼び方です。
→はい。でた、意味わからない説明

その話の主人公＝今回の場合、美希です。

その他、意味わからないことは聞いてください。

意味わからない答えを返しまｓ（（殴

No．1　忘れていたもの

俺は帰ってきた。

小さい頃住んでいたこの町に。

俺にはこの町にはいい思い出はあまりない。

あるとすれば、

『ねぇ、一緒に走ろうよ！！』

俺に走ることを教えてくれた君。

あの時、君と一緒に感じた風は忘れない。

また君に会えるかな？

？

「本当に１人で大丈夫？」

美希

「大丈夫だよ、姉さん。心配しないで。」

家の中に荷物を運び終わった。

と言っても、荷物は最低限の家具だけだ。

しかし、家は２階建の４ＬＤＫ。

１人暮らしの中学生にしては大きすぎる。

姉さん

「知り合いの人がゆずってくれるって。」

だ、そうで。

美希

「また何かあったら、連絡する。」

姉さん

「わかったわ。こっちも何かあったら、連絡するわね。」

そういって、姉さんは自分の車に乗った。

姉さん
「本当に大丈夫、風希。」

美希
「今は『美希』。風希じゃないよ。」

姉さん
「……そうだったわね。」

美希
「それと、俺は本当に大丈夫だから。」

そう言ってニッと笑うと、姉さんもつられて少し笑った。

姉さん
「じゃあ、そろそろ帰るわね。」

美希
「うん。気をつけてね。」

姉さん
「そっちも……ね。」

そう言って、去っていった。

美希
「さて、これからどうしようかな……。」

携帯で時刻をみると、午前１０時ごろ。

美希
「散歩でもしようか。」

そして、愛用のサッカーボールを持って、家をでた。

美希
「やばっ。忘れてた……。」
俺は今、道の端でしゃがみこんで頭を抱えている。
それは散歩を始めたころだった。
俺はある違和感を感じた。
――――――町に子供がいない。
なぜだと思う？
ヒントは今日はなんの変哲もない木曜日だということ。

木曜日の午前１０時。

普通、子供たちはどこにいる？

……そう、学校だ。

ちなみに俺は、転校手続きとかいろいろした覚えはないし、そんなことを姉さんが言っていた覚えはない。

つまり、俺は今学校に入っていないことになる。

入ってない……。

美希

「やばいな……。」

勉強？

そんなの、シラナイヨ。

じゃあ、何がやばいって？

……サッカーだよ。

俺、サッカー大好きだよ？

小さい頃からずっとやってきたし。

これからも続けるつもりだし。

でもな。サッカーは1人でするものじゃない。

1チーム11人だよ。

学校に入らないと、そんな人数集まらないよ。

美希

「どうしようかな……。」

姉さんはまだ運転の途中だろうから、今電話するのは迷惑だよな。

美希

「後で電話しよう！！」

そう言って立ち上がった。

そして、暇つぶしをするために広場を探しに行った。

美希
「７５、７６、７７、７８……。」
河川敷に行くと、サッカーのフィールドがあった。
フェンスがないし、誰もいないし、使っていいかな、と思ってフィールドに入った。
今はウォーミングアップにリフティングをしている。
美希
「９８、９９、１００！アップ終わり！」
そして、ゴールに向かって走り出した。
瞬間、風と俺が一つになった。
……こんな気持ちになったのは、いつぶりだろう。
最近、皆強くなることに必死で、俺もただ走ってるだけだった。
だからこんなに風が気持ちよく感じるのは、ひさしぶりだった。

バシュゥ

ボールがゴールネットを大きく揺らす。

胸からわきあっがてくるこのワクワクした気持ち。

全身で感じる風の気持ちよさ。

忘れていたものを今、思い出した。

NO．２　学校（前書き）

お久しぶりです。

投稿遅くてすみません。

ネタはあるんですがね……。

それでもgdgdっていう……。

あと、サブタイトルが……。

いろいろすみません。

――――――――――――――――――――

※作者はあまり皆の口調をわかってないです。

NO．2　学校

気がついたら、もう夕方になっていた。

久しぶりに思いっきりサッカーができて、昼食も忘れていた。

そんな俺に、サングラスをかけた男の人と、ゴーグルをつけた、ドレッドヘアの男の子が近づいてきた。

美希
「俺に何か用ですか？」

男の子
「俺は鬼道有人。帝国学園サッカー部のキャプテンだ。」

男の人
「私は影山零治。帝国学園サッカー部の総帥だ。」

帝国学園……どこかで聞いたことあるような……。

美希
「俺は風峰美希です。
で、俺に何か用ですか？」

影山さん
「その前に、一つ質問してもいいかな？」

美希
「いいですよ。」

影山さん
「君はどこの学校の生徒だ？」
俺は一瞬固まった。
どうしよう、と思ったけど、ごまかす理由も無いので、正直に話すことにした。
美希
「その、今日引っ越して来たんですけど、学校のこと……忘れてて、今はどこにも通ってないんです……。」
俺は驚かれるか、飽きられるかかなと思った。
けど、かえってきた返事は意外なものだった。
影山さん
「そうか。ちょうどよかった。」
美希
「へ、ちょうどよかった？」
驚いている俺に、鬼道さんが答えてくれた。
鬼道さん
「帝国学園にこないか？」
美希
「え……？」

帝国学園。どこかで聞いたことあると思ったら、ＦＦで４０年間優勝し続けている学校じゃん！！

影山さん
「我が帝国学園サッカー部の部員になってほしいんだ。」

美希
「え……、お、俺が……？」

驚きのあまり、声が震える。

「俺、入りたいです！！」

俺は今、帝国学園のとある教室のドアの前にいる。

もちろん、帝国学園の制服を着て、だ。

制服はあの後、影山さん……総帥がくれた。

手続きとかもやってくれたそうで……。

俺は帝国学園に通えることになった。

ちなみに、姉さんにこのことを言ったら、

「学校のこと、忘れてたわ。ごめんなさい。入れたなら、よかった。」

と言ってた。

あのしっかり者の姉さんが忘れるってことは、今はそうとう忙しいみたいだな。

先生

「入ってきてください。」

教室の中に入ると、鬼道さんがいた。

やっぱり、目立つ。

他に目立つ人といえば……

薄い水色の少し長い髪の毛で、眼帯をしてる人と、やけにおでこの出てる男子くらいだ。

先生
「風峰美希君だ。皆、色々教えてやってくれ。
風峰の席は、佐久間の隣だ。」

はい、と言ったのはいいけど、佐久間ってだれだ？

眼帯さん
「こっちだ。」

と眼帯をしている人が教えてくれた。

どうやらこの人が佐久間さんらしい。

美希
「ありがとうございます。」

小さくお礼をいって、ニコッと笑った。

佐久間さん
「あぁ。」

そう少し笑ってかえしてくれた。

放課後、鬼道さんと一緒にサッカー部の部室へ向かった。

他にも、佐久間さんとでこ広さんも一緒だ。

美希
「サッカー部だったんですね、佐久間さんと……でこ広さん。」

でこ広さん
「でこ広じゃねー！辺見だ！！」

美希
「あ、そうですか。スミマセンでこ見さん。」

でこ見さん
「でこ見じゃねー！！」

鬼道さん
「……。」

佐久間さん
「ハハハ……。」

そんなこんなで俺とでこ見さんの言い合いは部室につくまで続いた。

美希
「風峰美希です！ポジションはＧＫ以外ならどこでもＯＫです！よろしくお願いします！！」

そう言って深く頭を下げた。

？

「……もう上げていいぞ。」

そう言われたので頭を上げた。

言ったのは皆とユニフォームが違う人……、ＧＫの人みたいだ。

源田さん

「次は俺らだな。俺は源田。でこいつが－－－。」

一気に言われたから一瞬パニックになったけど、皆個性が強いから……うん、覚えた。

鬼道さん

「で、今まではどのポジションが多かったんだ？」

美希

「うーん……。

だいたい同じぐらいですけど、得意なのはＭＦですかね？」

鬼道さん

「……お前の実力が見たい。

グラウンドに行くぞ。」

ということで、俺たちはグラウンドに向かった。

グラウンドは室内にあって、とても広かった。

鬼道さん
「今からちょっとした一対一のゲームをする。相手は……辺見、お前がやれ。」

でこ見さん
「は、はい！」

いきなりだったからか、声が少し裏返っていた。

鬼道さん
「ルールは辺見からボールを奪えなかったら辺見の勝ち、奪えたら

風峰の勝ち、制限時間は1分だ。」

美希&でこ見さん

「「はい！！」」

1分か……それだけあれば余裕だな。

でこ見さん

「……。」

わぁ、でこ見さんがものすごい顔で睨んでる。

でも、まぁ……

美希

「負ける気がしないｗｗｗ」

でこ見さん

「何だと、てめー！？」

美希

「キャー、コワイー。」←棒読み

成神さん

「やめて下さいよ、先輩。」

そんな声は聞こえず、しばらくの間2人は言い合っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7452x/

イナズマイレブン　風と君と

2011年12月10日19時51分発行